

絆

「下町の法律事務所」 弁護士

栗原 周成

F氏が相談に來られた。

親友のヨッチンが胃癌で55歳の若さで亡くなった。治療費やら何やかんだで100万円近いお金を立て替えたが、返して貰う方法はないか。ヨッチンは独身で親族も見当たらないが、親から相続した100坪近い家を残しているのだという。

一歩踏み込んで話を聞いてみた。嫌がるヨッチンを検査入院させて胃癌切除手術を受けさせ亡くなるまでの3カ月半ほど、毎日のようにラインで励まし、夫婦で二日に一度位の頻度で身の回りの世話、医師との手術の打合せ、自宅の清掃などに独楽鼠のように走り回った。葬儀、市営霊園への納骨、四十九日の法要まで行ったという。

ヨッチンには相続権がある親族はいないようだ。親友というだけでは容易ではないが、F氏は特別縁故者に認められる可能性があるのではないかと考えて、ヨッチンとのなれ初めからをメモしてくるようお願いした。

メモによれば、二人の付き合いは小学校4年生の時に始まり、同じ市立中学に入学。揃って同じ第一志望校への受験に失敗、高一になって早々の1981年6月、二人で6日間の家出を決行。以来、暴走族の集会を覗き見するは、デイスコに参加するは、朝まで飲み明かして学校をさぼるは、と疾風怒濤の青春時代を送ったようだった。

二人が青春時代を過ごした1980年代は、管理教育に反発する高校生らの無軌道な行動が学校、親、世間から輦轡を買っていた。リーゼントに剃り込みを入れた写真が残されている二

人も、そんな若者とみられていた筈だ。

しかし、二人の脱線は、単なる反発に留まらず、チルチルとミチル兄妹のように、固く手と手を結びあつて青い鳥を求めて薄暗い森に分け入る冒険だったから、周囲の厳しい視線に晒されれば晒されるほど、絆は強くなつていったようだ。

F氏は、高校を中退して営業の仕事に就くや、たちまち頭角を現し、消防器機販売会社を興した。

ヨッチンは、放送作家を夢見て映像関係の会社に就職しながら通信制の大学を卒業した。

社会人になった二人は、毎月のように酒を酌み交わし、夢を語り合つた。残念ながら、ヨッチンの夢は簡単には叶わなかった。ヨッチンは次第に落ち込むことが多くなり、やけ酒を飲んでは深夜F氏のところへ電話をしてすることが多くなった。

「この頃のヨッチンはあなたにとって、お荷物でしかなかったのではないか。」と突っ込むと、「いいや、ヨッチンはたくさん勉強もしていた。ダメな男ではなかった。」と首を横に振り、「だから、ヨッチンに起業させようと、二人で出資金を出し合つて精神障害者グループホーム事業の会社を立ち上げた。その矢先の癌発病だったんだ。」と残念がった。

F氏のヨッチンとの絆は、心細い森の中で結びあつた手と手の温もりから生まれたものだったから、世間の荒波に揉まれても切れなかったのではないか？

翻つて、友情の絆の現在はどうだろう。バブル崩壊以降の「失われた30年」により中間層が激減した。その直撃をもろに受け、不安定雇用の中に身を置いている就職氷河期世代には、友との琴線に触れる関係を作るような場がどんどん失われてきた。

職場の人間関係は、正規社員、派遣社員、パート社員と分断されてしまっている。

給料は上がらないのに物価だけどんどん上がって、自分の面倒を見るだけにアップアップしている。

こんな有様で、F氏とヨッチンのような友情が、あそこでもここでも育つ将来を展望することが出来るのだろうか。とても心配だ。

裁判所は、F氏の献身を評価し、特別縁故者と認め、ヨッチンの遺産の半分を分与するとの決定を出した。